

【共同研究】

中学生の不登校の背景要因の検討

神田 信彦*・大木 桃代**

An Analysis of Background Factors of School Non-Attendance in Junior High School Students

Nobuhiko KANDA Momoyo OHKI

abstract

This study explored the background effect of school non-attendance in junior high school students. Two hundred ninety-eight junior high school students completed a questionnaire. It was consist of perceived control scale for children and items about their feelings for parents, classmates, teachers, classes, and so on. The results were as follows: (1) Desire for school non-attendance was controlled with High perceived control, perceived affective support from families and friends, and a feeling of school attractiveness. (2) Absent behaviour was controlled with high perceived control, a feeling of school attractiveness. (3) Maladjsutment to study, psychosomatic symptom and feelings of negative relationship with father, mother, and friends had aggravating effect on desire for school non-attendance and absent behaviour.

Key Words: school non-attendance, perceived control, maladjustment, junior high school students

問 題

子どもたちにみられる不適応行動の中でも不登校が社会的問題として注目されるようになって久しい。文部科学省によると平成12年度に30日以上学校を休んだ小学生は26,372名、中学生は109,710名であった。これは平成7年度に比べ小学生で9,803名(59.16%)、中学

生で44,688人(68.73%)増加している。学校における子どもたちの心の問題を解決すべくスクールカウンセラーが配置されるなどして一定の成果をあげている。しかし上に見るように不登校が増加傾向にあることは否定できない事実である。さらにこれが子どもたちの人口が減少傾向にある中での事態であるだけに問題は深刻である。

不登校に関する研究は、直接不登校の子どもたちを対象に行うことには慎重であらねば

* かんた のぶひこ 文教大学人間科学部人間科学科

** おおき ももよ 文教大学人間科学部人間科学科

ならない。また10年ほど前から「不登校が特定の子どもたちに起こりうる行動ではなく、誰もがそうなりうる可能性がある」との指摘もある(文部省, 1991)。この点を考慮すると実際に不登校に陥っている子どもたちではなく、一般の中学生を対象に不登校について検討を進めることには意義がある。そうした視点の研究をみると、小宮山・神田(1989)は中学生を対象に登校拒否(以下、不登校)欲求と関連する要因を検討している。その結果不登校欲求の生起に係るものとして対人関係での多くの不満や不安の経験、自己無能感、否定的自己認知、身体的疲労感などの自覚症状を見いだしている。本間(2000)は一般の中学生を対象に欠席抑制要因として「規範的価値」、欠席願望を抑制する要因として「対友人的適応」、「学習理解」及び「規範的価値」を見いだしている。森田(1991)も一般の中学生を対象に「不登校気分」をキーワードに分析を行っている。これは不登校欲求とほぼ同じ概念である。そして因子分析によって不登校の基底因として「友人関係性不安」「無気力・倦怠感」「対教師関係性」「学校外誘因」の4つの因子を抽出している。また、神田(1991)は主に小学生を対象にして統制感の高低が不登校欲求の有無や不登校行動の有無に係ることを見いだした。不登校欲求を抱いたり、不登校行動を行う傾向の高い子どもたちの統制感、そうでない子どもの統制感に比較し有意に低いというものである。統制感とは期待概念であり、自分が望んだ結果を自分の行動によって得ることができると、その人が考える程度を意味する。高統制感とは自分の行動が望んだ結果をもたらすと強く期待するので、当該の行動を起こすだけでなく、その実現のために必要とされる行動、例えば情報収集なども積極的に行うことが考えられる。低統制感とは反対に自分の行動が効果的でないと期待が高いため、実際に解決や対処が可能な場面でもそれを行わない傾向が高いとされる。これによって高統制感とは適応的であり、低統制感とは不適応的

であることが予想される。したがって、不応の一つとみなすことのできる不登校欲求や不登校行動に統制感が関係することは当然考えられる。

本研究ではこれらの点を踏まえ、中学生を対象に不登校の背景となる要因を検討した。取り上げた要因は統制感、交友関係に加え、父母や教師など家庭や学校における対人環境、つまり子どもたちに身近かつ重要な存在に対する認知である。この他、授業の理解や教師との関係などの学校生活との関係や心身症状との関係についても取り上げ、不登校との関係の検討を行った。

神田(1991)によれば統制感が小学生の不登校欲求に関わる要因であった。本研究では、中学生においても統制感が同様な要因であることを検討した。また父母をはじめとする家族に対する認知や、困難や失敗に直面した時に励ましを受けたり、ものごとがうまくいった時に一緒に喜んでくれるといったような情緒的サポートの認知が不登校に係ると考えられる。つまり家族は安定した生活の基礎を子どもたちに保証するものであると考えられる。子どもたちが家族との関わりに対してネガティブな認知を行うとすれば、学校生活に向けての積極的な意欲や行動は阻害されると予想される。さらに家庭内でトラブルがあれば、子どもたちは「学校どころではない」という気持ちを強く抱き、登校への意欲や行動が影響を受けることも予想できる。友人関係についても友人からの情緒的サポートを含め検討を行なった。このことも友人や家族からの情緒的サポートと同様なはたらきを持つと予想される。

方 法

調査対象 東京都内の公立中学校の生徒297名(男子150名, 女子147名)

調査項目 不登校欲求の有無をたずねるために「学校に行きたくないと思うことがよくある」、不登校行動の有無をたずねるために「病気やケガでもないのに学校をやすんでし

まうことがある」かどうかを「よくあてはまる」「あてはまる」「少しあてはまる」及び「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。

統制感の測定は神田(1993)の子ども用主観的統制感尺度(以下、統制感尺度)を用いた。統制感尺度は26項目からなり、上記の不登校項目と同様に4件法で回答を求めた。

「よくあてはまる」「あてはまる」「少しあてはまる」及び「あてはまらない」にそれぞれ4,3,2及び1点を与え、粗点の合計をもって統制感得点とするもので、得点が高いほど統制感が高いことを意味する。取りうる得点の範囲は26~104点である。

また、父母それぞれの関わりについての認知を尋ねる項目を各7項目、父母及び自己に対する好悪の感情を尋ねる項目それぞれ1項目ずつ、家庭・家族に関する項目5項目、教師との関係に関する項目1項目、友人に関する項目3項目、学校生活に関する項目2項目、

その他1項目である。これらはいずれも不登校欲求や不登校行動を尋ねる項目と同じように4件法で回答を求めた。

調査方法 各クラスの授業時間内に担任教師の教示によって集団実施した。

調査期間 1999年1月~2月に実施した。

結果と考察

不登校欲求と不登校行動 不登校欲求を測定する項目「学校に行きたくないと思うことがよくある」に対する回答数と比率を学年別、男女別に示したものがTable 1である。全体では12.2%が「かなりあてはまる」と回答していた。女子では学年の上昇と共にその比率は減少していたが、男子では逆に上昇する傾向がみられた。しかし男女別々に学年と不登校欲求について²検定を行ったところ、有意差は認められなかった(男子：²=11.07, df=6, n.s.; 女子：²=1.39, df=6, n.s.)

Table 1 「学校に行きたくないと思うことがよくある」への回答数と比率

		かなりあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない	合計
1年生	男子	3(5.88)	5(9.80)	12(23.53)	31(60.79)	51
	女子	8(13.79)	7(12.07)	18(31.03)	25(43.11)	58
	小計	11(10.09)	12(11.01)	30(27.52)	55(50.45)	109
2年生	男子	7(16.67)	5(11.90)	9(21.43)	21(50.00)	42
	女子	6(12.50)	4(8.33)	18(37.50)	20(41.67)	48
	小計	13(14.61)	9(10.11)	27(30.34)	41(46.05)	89
3年生	男子	14(24.56)	5(8.77)	18(31.58)	20(35.09)	57
	女子	4(9.52)	5(11.90)	13(30.96)	20(47.62)	42
	小計	18(18.18)	10(10.10)	31(31.31)	40(40.41)	99
全体	男子	24(16.00)	15(10.00)	39(26.00)	72(48.00)	150
	女子	18(12.16)	16(10.81)	49(33.12)	65(43.92)	148
	小計	42(14.09)	31(10.40)	88(29.54)	137(46.97)	298

注) 括弧内の数値は行方向の比率(%)を示す

Table 2 「病気やけがでもないので学校を休んでしまう」への回答数と比率

		かなりあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない	合計
1年生	男子	0(0.00)	3(6.00)	5(10.00)	42(84.00)	50
	女子	4(7.14)	3(5.36)	3(5.36)	46(82.14)	56
	小計	4(3.77)	6(5.66)	8(7.55)	88(83.02)	106
2年生	男子	3(7.14)	0(0.00)	5(11.90)	34(80.96)	42
	女子	3(6.38)	2(4.26)	2(4.26)	40(85.10)	47
	小計	6(6.74)	2(2.25)	7(7.87)	74(83.14)	89
3年生	男子	4(7.14)	3(5.36)	7(12.50)	42(75.00)	56
	女子	0(0.00)	2(4.88)	5(12.20)	34(82.92)	41
	小計	4(4.12)	5(5.15)	12(12.37)	76(78.36)	97
全体	男子	7(4.72)	6(4.05)	17(11.49)	118(79.74)	148
	女子	7(4.86)	7(4.86)	10(6.94)	120(83.34)	144
	小計	14(4.79)	13(4.45)	27(9.25)	238(81.51)	292

注) 括弧内の数値は行方向の比率(%)を示す

Table 3 不登校欲求と不登校行動の関係

		不登校行動		
		あてはまる	あてはまらない	合計
不登校欲求	あてはまる	43(14.72)	113(38.70)	156(53.42)
	あてはまらない	11(3.77)	125(42.81)	136(46.58)
	合計	54(18.50)	238(81.50)	292(100.00)

注) 括弧内の数値は行方向の比率(%)を示す

また、性別と不登校欲求について²検定を行ったところ、有意差は認められなかった($\chi^2=2.37$, $df=3$, $n.s.$)。

「学校へ行きたくない」という欲求を少しでも抱く者(「かなりあてはまる」、「あてはまる」及び「少しあてはまる」への回答の合計)は全体の約半数強であり、不登校欲求を抱くことはかなり一般的なことであると判断できる。中学生の時期は心身共に著しい変化を経験すると共に、アイデンティティ確立の入り口の時期でもあり、日常生活において様々な迷いや不安を抱くことも自然なことである。このことが登校への意欲に影響を与えることは十分考えられる。

一方、不登校行動を測定する項目「病気やけがでもないのに学校を休んでしまうことがある」への回答数と比率を学年別、男女別に示したものがTable 2である。全体では4.8%が「かなりあてはまる」と回答していた。1年生男子と2年生女子では「かなりあてはまる」への回答はなかったが、他は6~7%が「かなりあてはまる」と回答していた。程度の差はあれ不登校行動を起こしたと報告した者は、全体で18.5%であった。男女別々に学年と不登校行動について²検定を行ったが有意差はみられなかった(男子： $\chi^2=6.41$, $df=6$, $n.s.$; 女子： $\chi^2=5.23$, $df=6$, $n.s.$)。また性別と不登校行動について²検定を行ったところ有意差はみられなかった($\chi^2=1.85$, $df=3$, $n.s.$)。

以上の結果から以後は学年及び性別を考慮せずに分析を行った。さらに、個々の項目や項目間を分析するに当たり、「かなりあてはまる」「あてはまる」及び「少しあてはまる」への回答を統合し「あてはまる」と

し、「あてはまらない」はそのままの扱いで分析検討を進めた。

Table 3は上記の変換によって不登校欲求と不登校行動の関係を示したものである。少しでも不登校欲求を抱いた者の中で、実際に不登校行動を行ったことのある者は27.6%であるのに対し、不登校欲求を抱いていないとする者のうち8.1%が不登校行動を行っていた。これについて²検定を行ったところ有意な関係を得た($\chi^2=18.28$, $df=1$, $p<.01$)。このことは不登校欲求の有無と不登校行動の有無には関係があり、Table 3から判断すると、不登校欲求を抱くの方が不登校行動を行う傾向が高いこと、反対に不登校欲求を抱くことのない者は不登校行動を起こしにくいことを示している。

不登校欲求がない場合、不登校行動の生起の可能性はかなり低いと考えることができる。しかし不登校欲求を抱く者の約4分の1が不登校行動を起こしているに過ぎない。不登校欲求が存在することは不登校行動生起の要因であるが、それのみで不登校を説明するには十分ではない。

不登校欲求及び不登校行動と統制感との関係
統制感尺度の係数を算出したところ、その値は.77で一定の内の一貫性は保証された。全体を統制感得点の平均値をもって統制感高群(平均値=80.06, 標準偏差=6.32, $n=151$)と統制感低群(平均値=64.10, 標準偏差=6.12, $n=147$)に分けた。なお統制感の高低と性別を独立変数に、統制感得点を従属変数とした2要因4水準の分散分析を行った。その結果、統制感の高低の単純主効果のみが有意($F(1,291)=488.07$, $p<.01$)であった。

統制感の程度と不登校欲求及び不登校行動との関係を検討するために、それぞれ²検定を行った。統制感の程度と不登校欲求との関係 (Table 4) は有意であった ($\chi^2=38.19$, $df=1$, $p<.01$)。つまり統制感高群では不登校欲求を抱く者は少ないが、統制感低群では不登校欲求を抱く者が多くなっている。また統制感の程度と不登校行動について (Table 4) も有意であった ($\chi^2=21.47$, $df=1$, $p<.01$)。不登校欲求と同じように、統制感高群では不登校行動の見られる者の比率は少なく、低群では不登校行動のある者の比率は多くなっている。 χ^2 の数値で比較すると統制感是不登校行動よりも不登校欲求に対して強い関係が

Table 4 統制感高・低群別の「不登校欲求有り」と「不登校行動有り」の比率

	不登校 欲求有り	不登校 行動有り
統制感 高群	36.42	8.11
低群	72.11	29.58

注) 数字は%を示す

Table 5a 母親の対応に関する認知についての主成分分析の結果

項 目	第1主成分 の負荷量	第2主成分 の負荷量	共通性
お母さんが厳しすぎる	0.82	0.02	0.67
お母さんは私のことを自分の思い通りにさせようとする	0.80	0.04	0.64
お母さんは自分のことをわかってくれない	0.75	0.18	0.59
お母さんは細かいことに口を出す	0.73	-0.06	0.53
お母さんは私のことに無関心だ	0.70	0.01	0.49
お母さんは私をほかのきょうだいと差別する	0.67	-0.05	0.45
お母さんと話をする機会が多い	-0.11	0.98	0.98
固有値	3.33	1.01	-
寄与率 (%)	47.63	14.39	-

Table 5b 父親の対応に関する認知についての主成分分析の結果

項 目	第1主成分 の負荷量	第2主成分 の負荷量	共通性
お父さんはほかのきょうだいを私を差別する	0.84	-0.12	0.72
お父さんは私のことを自分の思い通りにさせようとする	0.82	-0.11	0.68
お父さんが厳しすぎる	0.81	-0.05	0.67
お父さんが細かいことに口を出す	0.81	-0.05	0.66
お父さんは私のことに無関心だ	0.76	0.17	0.60
お父さんは自分のことをわかってくれない	0.62	0.45	0.59
お父さんと話をする機会が多い	-0.15	0.91	0.85
固有値	3.67	1.01	-
寄与率 (%)	52.42	15.68	-

あると言える。

さらに統制感の程度と不登校欲求の有無と不登校行動の有無の組み合わせによる4群について²検定を行った結果有意であった ($\chi^2=54.44$, $df=6$, $p<.01$)。このことは「不登校欲求無し・不登校行動無し」群では統制感高群の比率が高いこと、また「不登校欲求有り・不登校行動有り」群では統制感低群の比率が高いことを示している。したがって中学生においても統制感是不登校欲求と不登校行動に関わる要因であることが示唆された。

不登校欲求及び不登校行動と、父母の関わり方の認知との関係 父母が子どもたちとどのように関わるかという点も子どもたちの学校生活への適応に影響すると考えられる。ここでは中学生が、父母が自分にどのように関わっていると認知しているのかという点からそれを検討した。

まず父母それぞれについて、自分への関わりがどのようなものであると感じているかを扱った7項目を対象に主成分分析を行った。母親の対応についてはTable 5a、父親の対応についてはTable 5bに示した通りである。いずれも第2主成分まで抽出された。第1主成分は父母ともに子どもへの「ネガティブな関わり」の認知を表している。第2主成分は父母ともに因子負荷量が高い値であったのは1項目だけであったので分析の対象から外した。第1主成分についてはそれぞれの項目の粗点の合計を「ネガティブな関わり」得点とした。得点が高いほど母親あるいは父親の自分への関わりをネガティブであると認知していることを示している。「母親のネガティブな関わり」の6項目の係数は $\lambda = .84$ 、「父親のネガティブな関わり」の係数は $\lambda = .87$ であり、共に十分な内の一貫性を持つと考えられる。これらについても統制感得点と同じように、それぞれの平均値を基準に高群、低群に分けた。「母親のネガティブな関わり」の高群の平均値は14.80 (SD = 2.70)、低群は9.56 (SD = .09)であった。「父親からのネガティブな関わり」の高群の平均値は13.57 (SD = 3.37)、低群は8.50 (SD = .80)であった。統制感と同様にこれらもそれぞれの2群の平均値に差があることを確認するためにそれぞれの2群と性別を独立変数として「母親のネガティブな関わり」得点及び「父親のネガティブな関わり」得点

を従属変数とする2要因4水準の分散分析を行った。前者については「母親のネガティブな関わり」の高低の単純主効果だけが有意であった ($F(1,291) = 478.84, p < .01$)。後者についても「父親のネガティブな関わり」の高低の単純主効果だけが有意であった ($F(1,290) = 272.99, p < .01$)。したがって高群・低群の2群に分けて分析を行う有効性が確認された。

まず「母親のネガティブな関わり」の高低と不登校欲求の有無との関係 (Table 5c) を見ると、 $\chi^2 = 4.59$ ($df = 1, p < .05$)であった。これは「母からのネガティブな関わり」高群は低群に比べ不登校欲求を示す者の割合が高いことを示している。また不登校行動の有無との関係 (Table 5c) は χ^2 検定では有意差はみられなかった ($\chi^2 = 2.138, df = 1, n.s.$)。このことは「母からのネガティブな関わり」の高低は、不登校欲求には関係あるものの不登校行動の有無とは無関係であることを示している。

Table 5c 「父母それぞれのネガティブな関わり」高・低群における「不登校欲求有り」と「不登校行動有り」

		不登校 欲求有り	不登校 行動有り
母からのネガティブな関わり	高群	46.57	14.38
	低群	59.39	21.05
父からのネガティブな関わり	高群	44.96	10.85
	低群	59.57	23.4

注) 数字は%を示す

Table 5d 各変数の相対リスク比

		低群/高群 のオッズ比	コーホート 不登校欲求・行動 「無し」に対して	コーホート 不登校欲求・行動 「有り」に対して
統制感の高低	不登校欲求	0.22	0.43	1.980
	不登校行動	0.21	0.77	3.60
母からのネガティブな関わり	不登校欲求	1.68	1.31	0.78
	不登校行動			
父からのネガティブな関わり	不登校欲求	1.80	1.36	0.76
	不登校行動	2.50	1.16	0.46

注) 相対リスク比は95%の信頼区間が1.0を含まないものについて掲載した。

次に「父親のネガティブな関わりの認知」の高低と不登校欲求有無との関係 (Table 5c) を見ると $\chi^2 = 5.77$ (df = 1, $p < .05$) であった。また不登校行動との関係 (Table 5c) は $\chi^2 = 7.38$ (df = 1, $p < .01$) であった。これは「父親のネガティブな関わりの認知」が不登校欲求及び不登校行動の有無に関係のあることを示している。つまり「父親のネガティブな関わりの認知」高群は低群に比較し、不登校欲求を抱いたり、不登校行動を起こす割合が高いことを示している。したがって、父親に対する認知のあり方が、不登校欲求ないしは不登校行動に、母親に対する認知のあり方が不登校欲求に、それぞれ関係する要因であることが示唆された。

次にそれぞれの要因の高低が、不登校欲求の生起や不登校行動の生起の可能性を持つかを検討するために相対リスク比 (オッズ比) を算出した (Table 5d)。その結果、統制感が高い場合は低い場合に比べ、不登校欲求の生起について .22倍、不登校行動生起に関して .21倍であり、統制感が高い場合は不登校

欲求及び不登校行動とも、その生起が抑制される可能性が高いことを示している。

「母からのネガティブな対応の認知」高群は低群に比較し不登校欲求生起の可能性が1.69倍であることが予想されるが、不登校行動については関係はなかった。さらに「父親からのネガティブな対応の認知」高群は低群に比較し、不登校欲求が生起する可能性が1.80倍、不登校行動が生起する可能性が2.51倍であることが予想され、それぞれの促進要因と考えることが可能である。

不登校欲求及び不登校行動と、その他の要因の関係 Table 6aには不登校に関係すると思われる18項目と不登校欲求の有無の関係について示した。いずれの項目とも「かなりあてはまる」「あてはまる」「少しあてはまる」を「あてはまる」に変換し、「あてはまる」、「あてはまらない」の2つに置き換えて分析を行った (次の不登校行動の有無との関係も同様である)。Table 6aは比率に加え、²検定の結果及びオッズ比を掲載した。

Table 6a 各項目と不登校欲求の関係と相対リスク比

	不登校欲求		χ^2	有意水準	相対リスク比		
	無し (n=136)	有り (n=157)			各項目(あてはまらない/あてはまる)のオッズ比	コーホート「有り」に対して	コーホート「無し」に対して
学校が楽しい	94.11	70.06	27.65	$p < .01$.15	.27	1.85
家にいるとほっとする	89.70	84.08	2.00	n.s.			
「学校に行かなくて」と思うと、気分が悪くなったり、おなかが痛くなったりする	13.24	40.76	27.40	$p < .01$	4.51	2.55	.57
自分によいことがあったときには、家族と一緒に喜んでくれる	84.44	64.33	15.12	$p < .01$.33	.51	1.55
学校の授業がよくわからない	69.62	78.71	3.13	n.s.			
何かに失敗したとき、家族がなぐさめたり、はげましたりしてくれる	66.91	53.50	5.44	$p < .05$.57	.73	1.30
先生は私のことをわかってくれないと思う	47.06	72.44	19.60	$p < .01$	2.96	.59	1.73
どうして叱られているのかわからないことがある	58.82	64.10	0.86	n.s.			
何かに失敗したとき、なぐさめたり、はげましてくれる友だちがいる	91.18	81.29	5.85	$p < .05$.42	1.40	.59
お父さんのことが好きだ	83.46	69.93	7.18	$p < .01$.46	.64	1.38
お母さんのことが好きだ	88.97	85.89	0.62	n.s.			
自分によいことがあったとき、いっしょに喜んでくれる友だちがいる	92.59	80.00	9.43	$p < .01$.32	.49	1.52
クラスの人とどうつきあったらよいかわからない	36.29	56.41	11.75	$p < .01$	2.27	1.56	.69
自分のことが好きだ	78.35	56.77	15.09	$p < .01$.36	.56	1.53
両親の中がよいと思う	84.21	71.62	6.38	$p < .05$.47	.65	1.37
自分の家族はバラバラだと思う	28.57	48.39	11.79	$p < .01$	2.34	1.61	.69

注) 各項目に「ある」と回答した比率 (%) のみを掲載した。

注) 相対リスク比は95%の信頼区間が1.0を含まないものを掲載した。

Table 6b 各項目と不登校行動の関係と相対リスク比

	不登校欲求			有意水準	相対リスク比		
	無し (n=238)	有り (n=54)	χ^2		各項目(あてはまらない/あてはまる)のオッズ比	コーホート不登校欲求「有り」に 対して	コーホート不登校欲求「無し」に 対して
学校が楽しい	84.03	68.51	6.93	p < .01	.41	.82	1.96
家にいるとぼっとする	87.40	87.39	0.63	n.s.			
「学校に行かなくては」と思うと、気分が悪くなったり、おなかが痛くなったりする	18.49	70.37	58.66	p < .01	10.47	1.72	.16
自分によいことがあったときには、家族と一緒に喜んでくれる	71.31	83.33	3.27	n.s.			
学校の授業がよくわからない	69.20	98.11	19.05	p < .01	23.15	1.30	.06
何かに失敗したとき、家族がなぐさめたり、はげましたりしてくれる	58.40	66.67	1.25	n.s.			
先生は私のことをわかってくれないと思う	55.04	85.19	16.75	p < .01	4.70	1.26	.27
どうして叱られているのかわからないことがある	58.40	75.92	5.72	p < .05	2.25	1.15	.51
何かに失敗したとき、なぐさめたり、はげましてくれる友だちがいる	86.13	84.91	0.54	n.s.			
お父さんのことが好きだ	76.72	75.47	0.04	n.s.			
お母さんのことが好きだ	86.55	90.56	0.63	n.s.			
自分によいことがあったとき、いっしょに喜んでくれる友だちがいる	86.07	84.62	0.08	n.s.			
クラスの人とどうつきあったらよいかわからない	38.14	85.18	39.06	p < .01	9.33	1.43	.15
自分のことが好きだ	67.94	61.11	0.92	n.s.			
両親の中がよいと思う	78.07	75.47	0.16	n.s.			
自分の家族はバラバラだと思う	34.19	61.11	11.80	p < .01	3.03	1.24	.41

注) 各項目に「ある」と回答した比率(%)のみを掲載した。

注) 相対リスク比は95%の信頼区間が1.0を含まないものを掲載した。

不登校欲求に関係のある項目を χ^2 値の高い順に挙げれば「学校が楽しい」、「『学校に行かなくては』と思うと、気分が悪くなったり、おなかが痛くなったりする(以下、心身症状)」、「先生は私のことをわかってくれないと思う(以下、教師の無理解)」、「自分によいことがあったときには、家族もいっしょに喜んでくれる」、「自分のことが好きだ」、「自分の家族はバラバラだと思う」、「クラスの友だちとどうつきあったらよいかわからない(以下、友人との関わり不全)」、「自分によいことがあったときに、いっしょに喜んでくれる友だちがいる」、「お母さんのことが好きだ」、「両親の仲がよいと思う」、「お父さんのことが好きだ」、「何かに失敗したとき、なぐさめたりはげましたりしてくれる友だちがいる」及び「何かに失敗したとき、家族がなぐさめたりはげましたりしてくれる」の12項目であった。これらについて相対リスク比を見ると、「あてはまる」と回答する場合、「あてはまらない」と回答するよりも不登校欲求を抱く可

能性が2倍以上あることを示す項目は、「心身症状」、「教師の無理解」、「友人との関わり不全」及び「自分の家族はバラバラだと思う」であった。これらを不登校欲求生起の促進要因と考えることができる。一方、不登校欲求生起の抑制要因と考えられるのは、「学校が楽しい」や家族や友人の情緒的な支えや関わりを示す項目、自分への肯定的態度である「自分のことが好きだ」や、「両親の仲がよいと思う」の項目である。

次に各項目と不登校行動との関係を見ると(Table 6b)、不登校行動の有無と関係のある項目を χ^2 値の高い順に挙げれば、「心身症状」、「友人との関わり不全」、「学校の授業がわからない」、「教師の無理解」、「学校が楽しい」及び「自分の家族はバラバラだと思う」の5項目であった。これらについて相対リスク比を見ると、「あてはまる」との回答が「学校が楽しい」が不登校行動生起の抑制要因である以外は、いずれも不登校行動生起の促進要因であるという結果であった。不登校欲求生

起の抑制要因であった家族や友人等の情緒的サポートや関わり等は、不登校行動生起の抑制要因として位置づけできない。

Table 7 不登校行動の促進要因の該当群・非該当群による不登校行動の有無

	不登校行動		合計
	無し	有り	
促進要因	非該当群 2(100.0)	(0.0)	20
	該当群 (24.2)	2(75.8)	33
合計	2(52.8)	2(47.2)	53

注) Fisherの直接法による正確有意確率は.00(片側)

さらに不登校行動に促進的に関係していると考えられる低統制感で、「心身症状」、「学校の授業がよくわからない」、「教師の無理解」及び「友人との関わり不全」の4項目すべてに「あてはまる」と回答した群と高統制感で4項目すべてに「あてはまらない」と回答した群だけを取り上げ、それぞれ該当群、非該当群として不登校行動の有無と不登校欲求の有無との関係を検討した(Table 7)。非該当群はすべて不登校行動無しに回答が集中している。つまり高統制感であり上記4変数に該当しない場合は不登校行動を起こす可能性がないことを示す指標となる。一方、該当群の75.8%が不登校行動が有ると回答している。それでも24.2%は不登校行動への促進要因に該当していても不登校行動を起こさずに調査時点に至っている。したがって低統制感で上記4変数が該当の場合、不登校行動を起こす可能性は大きいことを示すが、他にも不登校行動を抑制する要因があることを示唆するものである。

ところで、「学校に行かなくてはと思うと、気分が悪くなったり、おなかや頭が痛くなったりする」は、心身症状が現れるかどうかを尋ねているが、これは不登校欲求有り・不登校行動有り及び不登校欲求有り・不登校行動無しでそれぞれ60~70%台の回答比率を示している。これまで示してきたように、心身症状の有無が不登校行動に大きく関係していることはこのことから明らかである。それではその心身症状の生起をもたらす要因はどの

ようなことなのであろうか。これまで並列的に扱ってきた変数との関係を検討してみる。Table 6aの項目と「心身症状」との間でSpearmanの順位相関係数を算出した。算出は当初の4選択肢への回答を対象に行った。その結果、「友人との関わり不全」との間に.34($p < .01$)、「自分の家族はバラバラだ」との間に.26($p < .01$)「学校の授業がよくわからない」との間に.24($p < .01$)及び「先生は自分のことをわかってくれないと思う」との間に.20($p < .01$)の値を得た。この結果からすると、友人関係の不調や授業が理解できないことが、心身症状に関係することが予想され、「自分の家族はバラバラだ」に関しては、「学校どころではない」という心情から「心身症状」が生じることを予想させる結果である。

まとめ

統制感をはじめいくつかの変数が不登校欲求や不登校行動それぞれの生起の抑制要因や促進要因であることが明らかとなった。しかし、情緒的サポートに関しては不登校欲求生起の抑制要因としての働きがあるのに対して、不登校行動生起の抑制要因としては期待できないという結果も得た。このことは不登校行動が生じるときは、情緒的サポートからの抑制的働きを上回る強い促進的な力が働いているということを示すものであろう。しかし、こうした結果は、子どもたちへの情緒的サポートが不必要であるということの意味するものではない。多くの子どもたちは家族や友人からの情緒的サポートを認知しているのである。

また「父親のネガティブな対応の認知」が不登校欲求生起と不登校行動生起の双方に弱いながらも促進的はたらきを持つのに対し、「母親のネガティブな対応の認知」は不登校欲求生起に「父親のネガティブな対応の認知」よりも弱い促進的はたらきであることも明らかとなった。これはどのように理解すればよいのであろうか。一般的な家庭では、子どもたちは母親との関係に比べ、父親と接する時

間が少ないと考えられる。少ない時間の中で「父親のネガティブな関係の認知」が強いとすれば、それを補うようなポジティブな関係は、母親に較べ少ないであろう。このことが今回の結果に反映したと考えることが可能である。

本研究の結果である不登校欲求生起、不登校行動生起の促進要因を押さえ込み、抑制要因のはたらきを高めていくことは可能であろうか。不登校欲求生起及び不登校行動生起に促進的はたらきのある「友人との関わり不全」「学校の授業がわからない」を取り上げてみよう。「友人関係の関わり不全」は、具体的には「クラスの人とどうつきあったらよいかわからない」であった。同年代の子どもたちとの関わり方については、主に学校での種々の活動や放課後の関わりを通じて“自然”に身についていくと考えられる。しかし今日ではこうした関わりが不足しているのであろうか。そうであるとすれば、友人との関わり方について学習する場面をより多く授業場面に取り入れていくことが必要である。これについては、構成的エンカウンターグループを授業に取り入れるなどの試みも有効であろう。またソーシャルスキルトレーニングを通じて実際に関わり方を学習する機会を提供することも考えられる。また、「学校の授業がわからない」については多様な生徒がいる状況での指導は困難が多いと考えられるが、わかりやすい授業を目指すだけでなく、生徒の理解状況を逐次確認できるようにし、子どもたちの問題にすぐに対応できるようなシステムを作ることが求められる。

一方、抑制要因の一つである統制感を高めるためには、自分の行動と結果の間の随伴関係を明確に確認できる環境を整えることである。これは上述した抑制要因を押さえ込むための方法によっても実現可能である。またそれだけでなく、自分の行動が期待した成果をもたらしたことを確認しやすくするために周囲の大人が的確なメッセージを出すことなどが考えられる。

本研究は不登校欲求や不登校行動が現実の不登校と連続体にあるとの考えに立って進めてきた。この考えをさらに進めていくと、現実の不登校に関して行われている分類に対応するようにその背景要因から不登校欲求や不登校行動を分類することが可能であろう。残念ながら本研究のデザインではそれを確認することはできない。また、本研究では不登校欲求や不登校行動の背景要因を主に並列的に扱ってきたが、これについても上の分類と関係づけながら不登校に関わるモデルを提案する研究を展開することが今後の課題である。

引用文献

- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 神田信彦 1991 小学生の主観的統制感と不適応の関係の検討 - 不登校欲求との関連 - 立教大学心理学研究, 34, 57-62.
- 神田信彦 1993 子ども用主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討 教育心理学研究, 41, 275-283.
- 小宮山要・神田信彦 1989 中学生の登校拒否欲求の背景要因に関する研究 日本教育心理学会第31回総会論文集, 249.
- 森田洋司 1991 不登校現象の社会学 学文社
- 文部省 1991 生徒指導上の諸問題の現状調査
- 文部科学省 2001 学校基本調査速報